The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | ＜紹介＞滝川幸司著『菅原道真論』 |
| Author(s) | 黒田, 翔子 |
| Citation | 語文. 2015, 104, p. 67-69 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/70958 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紹　介

## 滝川幸司著『菅原道真論』

黒　田　翔　子

本書は、滝川幸司氏の菅原道真およびその周辺に関する論文をまとめたものであり、前著『天皇と文壇　平安前期の公的文学』（和泉書院　二〇〇七年）に続く論文集である。三部構成をとり、七〇〇頁を越える大著である。以下に目次を示す。

はじめに――本書の目的と構成――
第一編　詩臣としての道真
第一章　詩臣としての菅原道真
第二章　菅原道真に於ける〈祖業〉
第三章　菅原道真の「言志」
第四章　独り王戎が在る有り　――菅原道真と竹林の七賢――
第五章　応制詩の述懐――勅撰三集から菅原道真へ――
第六章　『菅家後集』――大宰府の道真――
付章　天智系としての宇多天皇――菅原道真「崇福寺綵錦宝幢記」をめぐって――
第二編　道真の交流
第一章　藤原基経と詩人たち
第二章　時平と道真――『菅家文集』所収贈答詩をめぐって――
第三章　安倍興行考
第四章　巨勢文雄考
第五章　島田良臣考
第六章　菅野惟肖考
第七章　島田忠臣の位置
第八章　道真の同僚
第三編　道真の家系
第一章　菅原清公伝考
第二章　菅原是善伝考
終章　菅原道真の位置
初出一覧
あとがき
索引（人名索引／研究者名索引／官職・官司索引／書名・篇名・詩題索引）

従来、「詩人無用」論は、儒家派・詩人派の対立構造の中で理解され、儒家派への反駁として、道真が「詩臣」としての自己を標榜したとされてきた。本書は、道真自身だけでなく、彼の詩友や父祖を再検討し、「道真を相対化すること」、「道真を、道真自身の言葉から論じるだけでなく、外から論じ」（本書六頁）ることで、「詩人無用」論をめぐる道真の「詩臣」としての態度を捉えなおそうとする。

第一編では、「詩臣」としての道真の姿勢とその背景を明らかにする。著者は、仁明朝から文徳朝にかけて、天皇主宰の詩会の

記事が、宮廷詩宴に限られるようになってきたことを指摘する。そして、宮廷詩宴が儀式として律令秩序の中に取り込まれ、天皇の権威を顕示するものとして確立したことを明らかにした。すなわち宮廷詩宴での賦詩は、「秩序維持の方策の一部」（五六頁）として機能していたとし、「詩人論では否定的に扱われていた宮廷詩宴の献詩」（五頁）を再評価した。「詩人無用論」が叫ばれる中、道真は政事の一環として行われた宮廷詩宴で献詩することによって、「詩臣」として「王沢」を歌い、その頂点に君臨する天皇、そして国家に報じることを理想としていたと説く。しかし、寛平四年九月の後朝宴での詩序を最後に、道真の詩に「詩臣」という語が見られなくなることを指摘する。そして翌寛平五年に参議に任じられて以降、急速に官位昇進し政務に携わらざるを得ない状況となり、「詩臣」であり続けることに挫折したのだと結論付ける。

第二編では、道真が交流した詩人について考察する。まず、摂関家との関わりを取り上げる。道真が基経邸文事において、基経を讃美し庇護を願う作品を数多く示し、「詩臣」ではない側面が看取できることを指摘する。また、時平との関係についても、先行研究では昌泰の変を念頭において、両者の対立を想定する解釈が主流であるが、贈答詩を読む限りでは、対立は読み取れないと述べる。つづいて、道真の詩友について目を向ける。目次に掲げたとおり、考察対象となった人物は、文学史上無名に等しく、先行研究においても辞書的な説明に留まる場合が多い。著者は、これらの伝記考証を行うために、歴史資料や歌集を丹念に調査し、歴史研究の成果にも幅広く目配りをした上で、当該人物の官職・位階の履歴、また公私の別なく関与した事件や出来事を詳細に検討している。その結果、「詩人派」とされるこれらの詩友たちは、弁官など実務官僚として、あるいは儒官として評価されている場合が多いことを明らかにした。島田忠臣を例に挙げ、詩才に長けているものの儒学の能力が劣る者は、昇進に結び付かないことを論じ、学儒こそが紀伝道出身者に求められていた能力であったとする。つまり、讃岐守に任ぜられ地方赴任することを嘆き、「「詩臣」であるこの私を、「外臣（＝地方官）」に任じないでほしい」（五一頁）と歌うような道真こそが、紀伝道出身者としては異端であると指摘した。

第三編では、道真の祖父・清公と父・是善を中心に論じている。特に、是善は薨伝の記述から「俗世間に背を向けた風月詩人」（五八九頁）と理解されがちであるが、実際にその生涯を跡づけすると摂関家と関わり菅家で初めて参議に昇るなど、官僚としては儒者そのものであったとする。

このように、本書は一見すると、『菅原道真論』と題しながらも、道真の周縁に多く筆を割いているかのように見える。しかしこれは「道真詩人論」の背景にある、詩人派・儒家派の対立を紐解こうとする著者の意図によるものである。著者は、第二編・第三編の考察を通して、詩人派とされる道真自身やその詩友、道真の父祖も儒家として生涯を送っており、儒家・詩人の対立構造の

曖昧さを指摘する。したがって、「詩人無用」論は、「儒家としての枠組みを超えて詩人たろうとしたこと」（七〇一頁）への批判であり、これに対して道真は、「詩臣」を標榜することで、昇進と直結しない詩作を、「公事として位置づけ」（七〇四頁）ようとしたのだと結論付けた。

本書の白眉は、道真を横軸・縦軸から照射するために、文学にとどまらず歴史学の知見をも踏まえて、丹念に考察している点であろう。巻末に索引を備えており、資料としても活用可能な有用の書である。

（塙書房、二〇一四年一〇月二〇日、七一四頁、二二，〇〇〇円）

（くろだ・しょうこ　本学大学院博士前期課程修了）